

# 保育の中のつながりを求めて

伊集院 理子

今年度、私は四歳児の担任となった。三歳児からの

進級児二十名、そこに新入児十五名が加わって、総勢

三十五名の子どもたちとの生活が始まった。私は、な

るべくまっさらの気持ちで子どもたちと出会い、一人

ひとりの様子をじっくり見て、一人ひとりとしていねい

にやりとりを重ねていくことを心がけてきた。子ども

たちは、それぞれに大きな環境の変化を体験していた

にもかかわらず、緊張感はもちろん、新しい環境

をそれぞれのペースで確かめながら、少しずつ少しずつ

つ環境に馴染んでいった。

新しいクラスでの生活が少し軌道に乗りだしてきた

四月の後半のある日、A子が突然、「美容院、やりた

い」と私に言ってきた。私は、どこかに仕舞っておい

たはずの紙で作ってあるはさみを即座に探した。昨

年、五歳児を担当していた時に、年に何回か美容院

ごっこが盛り上がり、その時に使ったものを取ってお

いたはずだった。昨年の子どもたちが幼稚園から果

立った後も、そのはさが有効に使われる時がまたくるかもしれないと思い、捨てずに取っておいたのである。

はさみを探しながら、A子が三歳児の時、よく五歳児の美容院にお客として来ていたことを、ふと思いだした。まわりのことがよくわかり、頭がまわるA子なので、多分、私のもと五歳児の担任だったことを思い出し、五歳児のお姉さんたちがやっていたように、今度は自分がやってみよう、その時のお姉さんたちの担任だった私なら、その時と同じようにやれるのではないかと思つたのではないだろうか。その日は、すぐにはさがみは見つからず、降園時間を迎えてしまったが、

「お姉さんがやっていた美容院のはさがみ、どこかに取つてあるから、明日までに必ず見つけておくね」とA子に一言伝えておいた。

次の日「はさがみ、見つかったんだ」と言つて、A子にそのはさを渡すと、A子はおもむろに、保育室の中に置いてある衝立を二つ、それから、いくつもの椅

子を廊下に次々出していった。その迷いのない準備ぶりに、昨年の五歳児のお店のイメージがすっかりあり、それを再現しようとしていることが伝わってきた。A子の動きに興味を示し、数人の子どもが手伝い始めた。どんどん店作りが進められる傍らで、美容院がそれらしくなるためには、はさみ以外に何があればいいかと私は考えた。A子と一緒に作ることも考えられたが、店作りをどんどん進めるA子の姿から、A子の心がむかっている先は、店を開店させ、お客さんを迎えることにあると判断し、子どもたちが店作りを進めているその脇で、私がもの作りをしてみようと考えた。

四歳の子どもたちにとって、そのものが刺激になって、自分たちでも作ろうとした時に、子どもたちの手で作れるものはどんなものか、どんな材料を使つたのか、瞬時に多くのことが私の頭の中を駆け巡った。材料室から、縄跳びの縄、厚紙、すずらんテープ、ラップの芯、トイレットペーパーの芯など、必要

と思われる材料を取りだすと、子どもたちの元に戻り、私は、まずシャワーを作りだした。子どもたちのそばで、「シャワーがあるといいんじゃない？ お水も出ているようになるといいよね」などと言いながら、厚紙を半円形に切ったもの二枚で縄の一方の端を包むようにしてシャワーヘッドを作り、さらに水が出ているようにするために、ずずらんテープを長く切ったもの数枚をヘッドの先につけてみた。次に、ラップとトイレットペーパーの芯をとめただけのドライヤー、厚紙を切った櫛なども作ってみた。

「これ、シャワーとドライヤーね。櫛もあるんだ。シャワーのお水は、細かく裂くと、もっとお水らしくなるかも」と言って、子どもたちに渡し、子どもたちがどう使うか、その先は子どもたちにまかせてみることにした。

少ししてから、店の様子を見に行くと、シャワーの水が細かく裂かれ、縄が廊下のスチームの管にちゃんと結びつけられていて、子どもたちなりに工夫してい

る姿が見られた。お客さんが大分集まってきた、A子たちは、はさみで髪の毛を切るまねをしたり、シャワーで水を流したり、美容師になりきっていた。

少しすると、A子が保育室の中にいる私の所に「シャンプー、ちょうだい」と言ってきた。本物らしさをだすには、実際の容器に近い物がよいと考え、材料室で手頃なものを探してみたもののちょうどよいものが見つからなかった。そこで、部屋にある実際に使っているクリーナーの容器を使ってみるのはどうかと投げかけてみた。「これは、本物だから、蓋は絶対にあけないでね」と伝えると、A子は「わかった」と言って、勇んでお店に戻っていった。

ものとしてシャンプーが加わったことで、ただ水を流すだけではなく、先にシャンプーをして、それから流すという手順が意識されるようになったようで、A子とB子はその手順のことで言い合う姿が見られた。「今もう流しているところなのに、またシャンプーかけないでよ」そう訴えるA子を見て、どっぷりと遊び

の世界に入り込んでいる子どもたちに感心した。そこは、〈嘘つこ〉(空想)の世界〉などではなく、〈本当の世界〉なのである。

お客さんが大分集まってきて、紙のはさみで髪の毛を切ったり、シャンプーをしたり流したり……と盛んにやっていたが、最後に何か飾りとして素敵なものをつけてあげられるといいと思い、各色の紙テープを子どもたちに渡してみた。すると、子どもたちは紙テープを長く切り、色とりどりの紙テープを直接お客さまの髪の毛にセロテープで貼りつけていた。一瞬、直接セロテープで髪の毛につけるのはいかがかと迷ったが、子どもたちが編み出したやり方を尊重しようと考えた。色とりどりの紙テープを頭につけた美容院帰りのお客さまは、目を引き、それを見てお客が次々お店にやってきて、この日一日ずっとお店は大繁盛であった。

子どもたちが帰った後、私は、はさみをもう一つ作り、美容院の道具が一式納まる箱を探し、全てのもの

を箱の中に納めて、箱の上に「びょういんのおどろぐ」と書いておいた。そして、その箱を子どもたちの目に留まりやすい場所に置いておいた。

次の日、C子が目敏く箱を見つけ、一人で椅子を廊下にどんどん運び出して場を作りだした。C子は新入の子どもであったが、前日のA子たちの遊びの様子を見て、それをそのまま再現しようとした。一日置いてあるが、友だちの遊びの様子をとらえ、それを精力的に自分の遊びに取り入れていこうとするC子のパワーにまず感心した。A子たちも、次々登園してきて、もう場所ができているのを見て、そこに加わっていった。そして、進級の子どもたちと、新入のC子が一緒に美容院を開店して、この日もまたお店は多くのお客でにぎわった。紙テープは、ただ長くつけるだけ



ではなく、輪にして中央を別の色の紙テープで止めてリボンらしくしたりと、工夫が加えられていった。

一日の終わりにには、美容院グッズは箱にしまわれ、また次の日は、興味を示した別のメンバーのもので使われた。こうして、美容院グッズはクラスの共有の一つの財産として位置づいていくことになった。

また、紙テープに関していえば、美容院ごっこで使ったことがきっかけになって、その後、紙テープを使っていろいろなものが作られていった。ジャバラ折りのカラフルなバネを作って、それを腕輪にしたり、手のひらにつけて隠し持っていて、手を開くとビヨーンとなるのを楽しんだり……、思い起こしてみると、こんなに紙テープを活用したことはこれまでになかったように思う。

こうして「美容院、やりたい」というA子の一言から始まった一連の美容院ごっこでの子どもたちの様子、そこでの教師の思いを綴ってきて、「子どもたち

の生活はつながっている」ということをまず強く思うわけである。

環境が変わり、担任も変わり、A子なりに緊張感ももって過ごしていたが、一方で自分が一学年大きくなった誇りのようなものもA子の中にはあったのである。三歳児の時に五歳児にしてもらった遊びを今度は自分がしよう、自分がしてあげようという思いがあつて「美容院、やりたい」というA子の言葉は導き出されたのであろう。その言葉の背景には、A子のそれまでの幼稚園生活の中での体験の積み重ねがあり、それがA子のそうした思いにつながっているのである。その思いを受け、教師の方も、「つなげていく」ことを意識して、以前に使っていたものを探すことから始めて、A子に働きかけていった。はさみを作ることは、大人にとってはそう難しいことではないので、A子の要望を受けその場ですぐ作ることも可能であったが、私は、前の年長児が使っていたものを探すことにこだわった。私の中に、学年を超えて、年度を超え

て、子どもの生活をつなげていきたいという思いがそこにあったからである。

教師は率先してお店らしくなるものを作ったが、子どもたちが自分たちの力で作ろうと思えば作れるもの、応用できるもの、先につながっていくものを強く意識していた。美容院グッズを一箱に納められるようにしたもの、生まれた遊びを先へとつなげていくために、意図的にしたことである。ひとまとまりになっていることで、興味をもった子どもが、興味をもった時に持ちだして使うという形で、時には大きな流れとなつて、時には細々とこの遊びは続いていった。

子どもたちの遊び・生活は、そもそも「つながっている」ものなのである。その「つながり」を捉え、さらに「つながっていく」ようにするにはどうしていったらいいか、先を見通しながら「つなげていく」教師の働きかけが、子どもたちの生活、遊びをさらに「つながりあう」ものにしていくのだと考える。「つながり」が連鎖していくという感じだろうか。

私が保育の中の「つながり」ということを強く意識するようになったのは、いつ頃からだっただろうか。教師になりたての頃は、「つながり」など意識するすべもなく、日々怒涛のごとく押し寄せてくる子どもたちの要望にただただ追われるばかりであつたことをふと思ひだす。

「つながり」ということを強く意識しだしてから、倉橋惣三先生の「流れいく一日」(『幼稚園真諦』第三編 保育過程の実際)という言葉がそれまでより一層深く意味をもつて響いてくるようになった。幼稚園創立百三十周年の年にあたつて、先人の教えに学びながら、朝来てからお帰りまで、昨日から今日へ、今日から明日へ、昨年から今年へ、今年から来年へ、必然的につながりながらずっと流れ続けていくような生活 子どもたちといっしょにつくっていくこうと、志を新たにしているところである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)